

ジョン・コイン

# 闇から来た 子供

CHILD  
OF SHADOWS

[公手成幸] 訳

## 闇から来た子供

発行日 1993年2月28日第1刷

著者 ジョン・コイン

訳者 公手成幸(くで しげゆき)

発行者 小川武夫

発行所 株式会社 扶桑社

東京都新宿区市谷台町6 〒162 TEL.(03)3226-8880

印刷・製本 凸版印刷株式会社

万一、乱丁落丁の場合はお取り替えいたします。

Japanese edition © 1993 by Fusosha

ISBN4-594-01109-8 C0197

Printed in Japan(検印省略)

定価はカバーに表示してあります。

ジョン・コイン/著

公手成幸/訳



# 闇から来た子供

Child of Shadows



## **CHILD OF SHADOWS**

by John Coyne

Copyright © 1990 by John Coyne

This edition published by arrangement with John Coyne,

via Peter Lampack Agency Inc., New York

through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

ア  
ニ  
タ  
へ

「邪悪が罰せられずにすむことはない、わたしはつねに信じていました」

アナベル・マルコフの言葉…彼女の夫であり、共産党政権下において追放されたブルガリアの作家兼批評家、ゲオルギ・I・マルコフを殺した者（たち）は、現ブルガリア政府の政治局によって糾弾されるであろうと述べて。

闇から来た子供

## 登場人物

|             |     |                          |
|-------------|-----|--------------------------|
| メリッサ・ヴォーン   | ——— | ニューヨークの元ソーシャル・ワーカー       |
| アダム         | ——— | メリッサが引き取ったホームレスの少年       |
| グレッグ・シュニリング | ——— | メリッサの元部下                 |
| コナー・コナハン    | ——— | ブルーリッジ・クラフト・スクールの陶芸教室の講師 |
| ジーン・マーティン   | ——— | ブルーリッジ・クラフト・スクールの校長      |
| ベティ・スー・イエイツ | ——— | 魯鈍な老女                    |
| リトルトン牧師     | ——— | 新天地幕屋教会の責任者              |
| マケイブ        | ——— | 新天地幕屋教会執事                |
| ニック・カードツケ   | ——— | ニューヨーク市警刑事               |



## プロローグ

ニック・カーダツケ刑事は、汚物や残飯の浮く下水トンネルのなかをそろそろと足を運んでいる。下水は、グランド・セントラル・ステーションの地下へ流れこんでいた。ステーションでは、乗り換え、乗り継ぎのレールが蜘蛛の巣のようにからみあい、ニューヨークはマンハッタンの中心街、そのまたどまんなかの地下にうがたれた何ダースもの暗いトンネルや、広大な操車場へと姿を消していく。

十ヤードあまり先に、映画のセットのような照明がほどこされた犯行現場があった。警察の写真班が仕事中で、トンネルの闇を切り裂くまぶしい閃光が刑事の目を焼いた。目を伏せると、足の長いドブネズミが通路をさっと横切って闇のなかへ逃げこんでいくのが見えた。

「くそ」と彼は声を発し、自分の声にぎよつとした。地下は大嫌いだった。はつきりいつて、地下鉄というやつはぞつとしなない。あれは騒音と暴力、そして汚穢のすむ世界だ。正気の間人なら、地下鉄には乗らない。自分の子どもたちに利用を勧められるしろものではなかった。この街の地下でなにが起きているかを知らなければ、話は別だが。

彼は胸ポケットから警察バッジを出して、スーツの上着にとめつけてから、死体をかこむ警官たちの輪に身を押しこんで、声をかけた。湿気た壁に声がこだまする。「ガイシャはどんなだ？」

私服刑事が何人かわきによけて、彼に目をむける。

「えらくキュートなやつですよ、警部補」とひとりがいって、体の位置をずらしたので、小さな少年の全裸死体がニツクの目にはいった。

「なんてこった」被害者をながめながら、刑事はつぶやいた。裸の少年は、濡れたコンクリートの梁のすみで暖を求めるように、体を丸めていた。

「性犯罪か？」その子から目を離さずに、彼はきいた。子供の死体を見るたびに、いつも自分の息子のことを考えてしまう。

「セックスと麻薬<sup>ドラッグ</sup>。ここに、ほかになにがあります？」と同じ警官がいつて、にやつと笑い、少年のかたわらにかがみこむ。

その警官は手術用の手袋をしていた。ニツクは、警官が少年のむきだしの尻たばに手を押しこんで、全長六インチほどの細いプラスティック・チューブを直腸からとりだすのを見た。「このちびは、けつにコカイン<sup>ホワイト・ステイツク</sup>を隠した経験が山ほどありそうですね」

カードツケは息を飲んだ。何度となく出くわした事態なのに、これがはじめてのことのように思えた。

「ほかになにか？」と彼はきいた。ほかの警官どもは虫が好かない。

「お望みなら、いくらでも」とその警官はいい、チューブを少年の体内にもどしておいて、手をのばし、ニック・カードツケの目に少年の胸が見えるよう、硬直した死体のむきを変えた。「お望みなら、いくらでも」また同じことをいつて、わきによける。少年の胸に血まみれの穴があいているのを、ニックは見た。

ティーンエイジャーの死体にうがたれた、深く広い裂孔。なんだ、あれは。刑事は、非常用のライトが投げかける、陰影のきついぎらつく光のなかに足を踏み入れた。

「どうということだ？」と問う声が、やけにむじやきに響いた。

「胸を切られたんですよ、警部補」と警官。「見てのとおり」

刑事は制服警官のひとりから懐中電灯をとりあげ、少年の胸の穴に光をむけた。小さな死体は血だらけで、あらわになった筋肉や体組織にうじが群がっている。

「えぐりとられてる！」と彼は叫んだ。

「わたしがそれをしっかりと見ていなかったとでも、警部補？」と警官は笑い、周囲を見まわして、「しっかりと見たよな」と強調するようにくりかえした。

「こいつはナイフで切られた傷じゃない」ニックは思いを声に出した。

「やっぱりね」若い警官が同意した。「鑑識も同じことをいつてました。どこかのくそ野郎が、このちびの心臓をえぐりとったんだ！」声に興奮の色がまじる。

カードツケは立ちあがった。

「われわれの仕事は終わりですね、警部補？」と別の警官がきく。ニックはうなずいた。若い

警官が硬直したむくろから手を放すと、死体はまたごろんとうつぶせになって、地下壁のかたい基部に顔面を打ちつけた。

「ああ、終わりだ」とニツクはつぶやき、制服の警官と、現場にたかっている通りすがりの労働者の群れをかきわけて、その場を離れた。

トンネルの闇のなかであとをふりかえった彼は、非常ライトのむこうの通路を見、グランド・セントラル・ステーション下層の薄暗い光に目を移した。あの少年はどういうわけで、こんな地下深くまで降りてきたのだろう。呼びこまれたか。そうに決まってる。なんとならば、直腸にドラッグを押しこんでいたから。これもまた、クラック売買の世界で生じる、ゆがんだ結末のひとつだった。

あとのなりゆきはわかっている。担当が死体の特徴を確認し、写真持参でFBIに出むいてコンピュータを動かし、該当する人間はいないものと調べる。すべて、ありきたりの手順だった。ありきたりでないのは、あのちびの身に降りかかったこと。あの少年の心臓をえぐり取ったのは、いったいどのだれだ？　そう自問してはみたが、こういった惨殺事件の意味はよくわかっていた。まえにも、こんなのお目にかかったことがある。この都市にまた、新たな連続殺人犯が出現したのだ。

だれかがそのホームレスの少年に、サラがガラス瓶に入れてオフィスのデスクにおいていた  
飴<sup>ハード・キャンデー</sup>玉を一個、与えていた。少年はひらいた掌にそれをのつけて、明るい黄色の包み紙を  
ながめている。部屋の端ばしに立っている刑事のひとり、その子はそれがなにかわからんよ  
うだから開けてやれと、グレッグにいった。グレッグは包み紙をとって、少年の掌にキャンデ  
イをもどしてやった。少年は、これでオーケイだというグレッグ・シュニリングを見、キャン  
デーを見て、そのあとやっと、小さな黄色のかたまりのにおいを嗅いだ。ずんぐりむっくりの、  
別の刑事が叫ぶ。「いやはや、いまのを見たか？ このちびは、あれがなにかを知らんだ！」  
メリッサ・ヴォーンが、オフィスの奥のコーナーにある自分の仕切りを出て、ドアのほうへ  
歩くと、受付係のサラが、グラランド・セントラル地下のトンネルで刑事たちが少年を発見した  
ときのようなすを説明にかかった。ネズミの群れのなかで暮らしてたのよと、サラは茶色い目を  
見ひらいてささやいた。

メリッサは足をとめず、人ごみのあいだを縫って歩く。みな、彼女の職分を心得ているから、

少年に関する追加情報を伝えながら、すばやくよけて彼女を通した。あの子はしゃべらないと、だれかがいった。いや、しゃべれないといったのか。自閉症かもねとサラがつけたし、いとこのラルフの話をまたむしかえす。

メリッサはなにもいわず、なぜ警察はその子を管轄部局にでなく、よりによつて警察署に連れこんだのかという彼らの質問にも答えなかった。どの声にも、自分たちの仕事の間が侵害されたとでもいいかげんな不快感がこもっていた。それもそのはず、彼女にしても発してみたい質問だった。これは一般的な手順ではない。ホームレスの子は、市の人的資源局に連れていくものなのだが。

彼女はグレッグを、サラのデスクの縁に尻をのせている彼を、じつとながめた。彼は身をかがめて、ほほえみかけたりささやきかけたりして、あいかわらず少年を元気づけようとしている。その彼がふたつめのキャンディをとりだして包み紙をはぎ、自分の口にぽんとほうりこんだ。少年は彼にむけていた目を、自分のよごれた掌にのっている小さな丸い黄色の玉にもどした。

メリッサは人垣に近寄った。少年の姿が見え、そのにおいもしてくる。みんながこの子をこの部屋に入れたわけが、やつとわかった。ひどい悪臭だった。

髪がまったくなく、眉毛もない。つるりとした、みごとに丸い頭が、白く光っている。奇形の人間を見せる見せもの小屋から連れてこられたもののように見えた。みすばらしいこと、おびただしい。椅子にすわっているが、足が床にとどいていない。とてつもなく痩せていて、テ

レビで見るアフリカの飢えた子どもたちを、ふくれた腹と棒のような脚をした子どもたちを、思わせた。年のころは十二、三歳だろうか。ホームレスの子どもたちはたいてい、実際の年齢より幼く見えることは、いままでの経験で心得てはいるが。

少年の着ているシャツとパンツは、どちらもぼろぼろで、もとの色あいがわからないまでによごれきっていた。足もとに目をやると、左足には何枚もの布の切れはしをひとまとめに重ねてくくりつけてあるのが見てとれた。右足には男ものの黒い靴を履いているが、サイズが大きすぎる。それでも少年は、太い糸でその古びた靴を素足にかたく巻きつけていた。

ひどいものだ、彼女は思った。

グレッグがこちらに目をむけて、なにかいった。

メリッサは首をふって、問いがきこえなかったことを知らせた。少年から目が離せない。また自分の掌に顔を近寄せて、キャンデイのにおいを嗅いでいる。食べて、と彼女は胸のなかでひとりごちた。

そうだった。少年が、掌のうえの丸い飴玉をなめて、口にぽんとほうりこんだのだ。そげたほおに一瞬、ふくらみができる。少年の顔が輝き、周囲のみなが笑い声をあげるのがメリッサの耳にとどいた。

彼女は膝をまげて、目の高さを少年のそれに合わせ、反応が生じるのを待った。反応がないので、指をぱちんと鳴らして注意を引いてみる。

少年がこちらに、さっと目をむけた。その目に恐怖の色がある。メリッサは、まずいことを

したと思い、安心させようとすぐに微笑をむけたが、少年の灰色の目に浮かんだ恐怖の色は消えなかった。犬が威嚇するときのように、歯をむきだしている。

「いかん」とふとつちよ刑事がいい、ほかの何人かは、いつでも少年に飛びかかってとりおさえられるような構えを見せた。彼女はすばやく片手をあげて制し、少年から目を離すことなく微笑を送りつづけた。

こびりついた街の汚穢の奥に、美しい少年の素顔が見える。非の打ちどころのない顔立ちと、生きいきと澄みきった灰色の目。ホームレスの顔にかならずうかがえる、あの打ちひしがれた感じはどこにもなかった。

少年が傷を負っていることも、メリッサは見てとった。ひたいに血がこびりつき、左目の下が大きく腫れて黒ずんでいる。警官たちが、捕まえるときに負わせたものだろう。彼女は、見知らぬ犬を相手にするときのように、ひろげた掌をさしだした。少年が身をこわばらせて、背を丸める。

「気をつけろ」刑事のひとりが彼女に警告した。

「あんたに噛みつくかもしれない」と別の刑事がいい、また別のひとりがつづける。「このちびがキーファーになにをやったかは知ってるな？」

「やばい病気をうつされるかもしれないぞ、あのようすじゃ」と最初に口をひらいた刑事がいった。少年をかこむ人の輪が、あとずさる。

メリッサは、刑事たちの言葉には耳を貸さず、だが少年にむけた目はそらすことなく、この



子がいまの発言になにか反応を示しはしないかと、顔や目になんらかの反応が現われはしないかと、じっと見つめた。

かたときも少年から目を離さずに、手をのばし、サラのキャンディ瓶からまたひとつ飴玉をとりだして、包装を解く。いまは少年もこちらを、というよりキャンディを、それをどうするつもりなのだろうという目で、見つめていた。少年が唇をなめ、唾を飲むのが見える。キャンディを注視したときの、あの目の輝きといったら。

メリッサは掌にかたいキャンディをのせて、その手をさしだした。少年が一挙動でさっとキャンディをつかみとり、ぽんと口にほうりこむ。そのあとまた、夕食のテーブルから食べものを盗んだ犬のように、木の椅子の上で体を丸めた。

彼女の背後で秘書のひとりが、こんな子をこのオフィスに連れこむなんてとんでもない話だと不平をこぼし、部屋に満ちた怒りの気配が刑事たちにむかう。何人かが、そもそもなぜこの少年をここに連れこんだのだと問いかけた。

メリッサは、頭上を行きかう口論は無視して、デスクの足もとところで膝をかがめていた。手をのばせば子どもにとどく距離だ。

グレッグが問いかけてくる。われわれはなにをすればいい？ ベルヴュー病院に電話を入れようか？ このちびを保護施設に送ろうか？ 時刻はすでに五時を一五分まわり、メリッサの部下の何人かは時計に目をやって、デスクのかたづけを再開し、職場を離れる準備にとりかかっていた。